

2019年3月14日、立教大学池袋キャンパスを会場として名古屋大学・立教大学合同研究会が開催されました。当日は、大学院生8名が研究発表を行い、後半では両校の教員5名による「近現代文学・文化研究の「いま」と「これから」と題するセッションが行われました（詳細はプログラム参照）。大学院生の研究発表に関しては、個々に論文化する予定があると思いますので、ここでは後半のセッション（教員の話題提供と質疑応答）のみ報告します。ご多忙の時期にわざわざ本学にお越しくださり、貴重な合同研究会の機会をもたらして下さった名古屋大学大学院のみなさま、並びに、教員として企画のサポートをして下さった飯田祐子さん、日比嘉高さんには心より感謝申し上げます。

—立教大学・名古屋大学合同研究会—

日時：3月14日（木）9：00—18：00

場所：立教大学池袋キャンパス12号館 地下1階 第1・2会議室

プログラム

9：00—9：10 開会挨拶

9：10—12：00 学生発表 修士の部

- 趙書心（名古屋大学 修士課程1年）「性欲化される女性同性愛表象—田村俊子『春の晩』論」
- 瀬口真司（立教大学 修士課程1年）「痙攣する「唇」—『緑色研究』にみる塚本邦雄の身体」
- 小島秋良（名古屋大学 修士課程1年）「火野葦平と日中戦争—「花の命」戦後再出版を軸に」
- 松本拓真（立教大学 修士課程2年）
「大江健三郎『静かな生活』論—イーヨーの「性」とマーちゃんの身体性」



12：00—13：10 昼休憩

13：10—16：05 学生発表 博士の部

- 加島正浩（名古屋大学 博士課程3年）
「被災を書くということ—東日本大震災以後の福島県の文芸同人誌活動概説」
- 加藤明日菜（立教大学 博士課程1年）
「仮想社会における食—佐藤春夫「のんしやらん記録」を中心に」
- 楊佳嘉（名古屋大学 博士課程2年）
「林芙美子の紀行文における中国認識（戦前）—1930年と1936年の中国旅行を通して」
- 渡部裕太（立教大学 博士課程4年）「燃え失せる秘密—武田泰淳「秘密」論」

16：20—17：50 教員セッション 「近現代文学・文化研究の「いま」と「これから」

石川 巧（立教大学）	「人、物、お金、ときどき勉強」
川崎賢子（立教大学）	「震災後の関心の変化」
飯田祐子（名古屋大学）	「ジェンダーとクィアについて」
金子明雄（立教大学）	「文学／文学研究における「正統」と「正当」のあいだ」
日比嘉高（名古屋大学）	「物と知をどうつなぐか」

17：50—18：00 閉会挨拶

18：30—20：30 懇親会

1 石川巧「人、物、お金、ときどき勉強」

立教大学の石川です。与えられた時間に限りがありますので、端のお話しさせていただきます。教員セツシヨンが企画されたとき、日比さんから「にぎやかし」ですから、と言われたのですが、それを真に受けて与太話をしようとしているのは私だけのようです。みなさん、しっかりしたレジュメを用意されていて少し焦っています。

実は私は明日が誕生日です。私は一九六三年の生まれですから明日で満五六歳です。立教大学は六五歳で定年ですから、本学に勤務することができる期間は残り一〇年ということになります。

ここ数年、私は戦中・戦後の稀覯雑誌を見つけてきては解説付きの復刻版を出すという作業を続けているのですが、そうした流れ作業のような仕事ばかりしているうちに、自分の研究スタイルのようなものが見えなくなってしまう気がしています。それにともない、残りの研究生活をどのように過ごしたらよいのか？ という迷いも生じています。今日は、それに関連して、いま悩んでいることを率直にお話ししたいと思います。

配布した近年の研究テーマ一覧にも書きましたが、私はちょうど三〇歳のとき山口大学に就職しまして、そのあと移った九州大学を含めて一三年間、山口・福岡で過ごしました。いまにして思うと、当時の私には研究上の苦悩など殆どなく、自由に研究ができていたような気がします。また、東京（中央）を仮想敵に見

立てて、「オレは地方に根を張って、いま自分が立っている場所から見える光景を問題化していくんだ」という妙な気構えもありましたので、新しい知見を得るために勉強することが愉しかったわけです。私はもともと菊池寛、川端康成、久保田万太郎などを中心に大正から昭和にかけての小説、戯曲を研究していましたが、そうした作家研究に対する興味がまったくなくなり、文学の言説を通して様々な問題編成を試みるような仕事をしたいと考えるようになりました。

あの頃、私を育ててくれたのは『敍説』という文学批評雑誌と、そこに集う同人たちなのですが、この雑誌は特集主義を取っていたため、私も「海辺の光景」「日本近代文学の脇役たち」「島」〔「精神病院」の文学〕「変容する欲望——高度経済成長期を読む」など、様々な企画の編集を担当しました。また、当時、九州大学の花田俊典さんが支柱となつて、福岡周辺にいた若手研究者が批評理論の会という研究会をしていたのですが、難解な理論書を毎月一冊のペースで読み、発表したり議論したりしていました。私の三〇代は、毎日ひたすら勉強し、そこで得た学識を研究に役立てていく、という循環サイクルのなかにあったような気がします。

それから、当時は『国文学 解釈と教材の研究』（学燈社）や『国文学 解釈と鑑賞』（至文堂）といった商業雑誌があり、若手研究者には、よく無理難題のテーマが与えられました。恐らく、著名な研究者が断つた仕事や誰もやりたがらないテーマが私たちに回されたのだと思います。自分が読んだこともないような作品、作家に関する依頼原稿が舞い込み、短期間で原稿にするという作業はとても大変でしたが、それは子どもの宿題のようなもので、

訓練を続けているうちに段々と処理能力が向上してきます。同世代の研究者たちが競うようにして自分の専門以外のテーマで原稿を書き、それが活字化されるというのは、いまにして思うととても恵まれた時代だったのだなあと思います。

ところが、一三年前に東京に出てきて立教大学で研究するうちに、気が付けば研究スタイルが大きく変わってしまったわけです。ちよつと生臭いお話ですが、科学研究費の大型プロジェクトに参加したり、学内外の研究者との共同研究を企画したり、海外の大学との交流を図ったりしていくなかで妙な欲が出ってしまったといましようか、まあ簡単にいってしまえば予算を獲得することが研究の価値であるかのような錯覚に陥ってしまったわけです。必然的に、夜中まで研究室にもって研究計画書や報告書をまとめる作業が多くなりました。決められた期間内に成果物を出さなければならぬため、出版社との打ち合わせや予算処理にも頭を悩ませることが多くなりました。自分の論文を書くよりも学部生や大学院生の論文を修正している時間の方が多くなり、どんどん疲弊している感じがしています。その原因を突き詰めていくと、結局、自分が「勉強をしていない」ということに突き当たるわけですが、人間というのは忙しさにかまけているうちに自分を正当化しなくなってしまうのだと思います。

つい最近も、ここにいらっしやる金子明雄さん、川崎賢子さんと『江戸川乱歩新世紀』（ひつじ書房）という共著を編んだのですが、見本が自宅に届いたとき、ちよつと褒めてもらおうかと思つてうちの妻に見せて、「なかなかカッコいい本でしょ？」と言つたら、大真面目な顔をして「あなたの最近の研究は全然面白くな

い」と反発されてしまいました。「むかしのあなたは本棚にある本を片端から読んでいたけど、いまの書庫に積まれている本はただの資料にしか見えない」（全然読んでないでしょ！）とも言われました。「キツイなあ」と思いつつ、あらためて振り返ると、確かにその通りなんです。雑誌を発掘して復刻しました、研究計画書を書いて予算を取りました……だけでは、自分自身を進化させることができないのだらうと思います。家のなかでは「老後は古本屋のオヤジになる」などと言い張つたりもしていますが、素人が簡単にできる仕事ではないことも承知しています。そんなことになで、私のいまの悩みは「最近、全然勉強していない」ということに尽きるわけです。

そうしたなか、たまたま二〇一八年度から日本近代文学会の編集委員長という役目を与えていただき、若い研究者たちの論文に接する機会が多くなりました。当然のことながら、私自身もそこで多くの刺激を得られるだろうと期待していました。ところが、いま『日本近代文学』に投稿される論文を読んでいると、「ちゃんとした論文」が意外に少ないことに驚かされるんです。私が考える「ちゃんとした論文」というのは、(1) 先行研究の蓄積をしつかり踏まえていること、(2) 正確な文章が書けていること、(3) 対象となるテキストを的確に読み解いていること、(4) 論理に飛躍がなく説得力のある内容であること、など、極々常識的なものです。活字にしよと思うのであれば、それくらいの水準はクリアしてよ、という感じです。

しかし、投稿論文のなかには、事前に第三者の眼を通していないもの、相互批評の場で採まれた痕跡がないものが相当数ありま

す。前日まで徹夜で書き続けてそのままポストに投函したようなものもあります。研究って、やっぱり他者の眼を経由させて書き直したり修正したりしないといけないものにはならないのではないかと、という気が強くなります。また、自分の論文を大きく見せるために針小棒大的な表現を駆使するもの、それまで誰も論じていないテキストだからというだけで自分の論文が画期的な内容だと誇示するものもあります。そういう論文を読んでいると「もつと自分の問題編成をしつかりやって、きちんとした論理を構成しようよ」と言いたくなります。「勉強不足は、私を含めて日本近代文学研究の業界そのものに蔓延しているのではないか？」という疑念すら抱きます。

なんだか暗いお話になってしまいましたが、もう一度、私自身が残りの一〇年をどうやって生きていこうかという問題に戻ります。私はこの春に大宅壮一文庫と組んで雑誌文化研究会というのを立ちあげました。また、中国の研究者との共同研究で中国国内の主要図書館に所蔵されている日本語書籍、新聞、雑誌のデータベースを作成する仕事にも取り組んでいます。「それじゃあ、いままでと同じじゃないか」という突っ込みが入ってきそうですが、とりあえず考えているのは、それを単なる資料探索にするのではなく、「日本文学は東アジアで何をやってきたのか？」という観点から探究していくための材料にしたいと考えているわけです。それはある意味、ここにいらっしゃる日比嘉高さんの研究テーマとも重なるかもしれませんが、文学を通して戦時下の日本人の欲望のあり方を検証するというのが、いま考えていることのひとつです。

運のよいことに、私は今年の秋、台湾日本語学会で基調講演をさせていただく機会を与えてもらいました。テーマは「日本語・日本文学研究の人文知・社会知」だそうです。いまの私は、「人文知」という言葉を聞いてもそれが何を意味しているのかよく分からない状況ですが、それは逆にいえば、ゼロから勉強して準備せよという天啓でもあると思います。研究者にとって何よりも嬉しい作業は、様々な文学テキスト、文献、資料を読み込むことで自分の知らない世界を涉猟していくことです。(「知」の領域を拡大していくことほど面白いことはありません。研究者は、いま書かなければならないテーマに関して必要な文献を調べるだけでなく、いままで全然関係がないと思っていた領域に自分を連れ出していくことが大事だと思います。

私の場合はこちらと遅すぎるかもしれませんが、研究を志す大学院生のみなさんには、自分を遠くに連れ出してくれる書籍、他者、環境と出遭って欲しいなと思います。論文は堅実な内容が大事ですけどね。――以上です。

2 川崎賢子「震災後の関心の変化」

よろしくお願ひいたします。わたしも、にぎやかしのつもりで、ぺらっと作って来たんですけど。わたし自身はずっと関心をもっていたのはモダニズム文学とモダニズム表現というものが、ざっくり言うと、吉本隆明さんあたりが「芸術的抵抗と挫折」で批判したように、果して日本のモダニズム表現というのは脆弱なもので、日本の戦時的な体制が進行するに連れて、いちはやく体

制に駆け寄ったとか、もつとも重大なときに自身の獲得した新しい表現を放棄してしまったとか、そういう言説は正しいのだからかということ、——若い頃から何十年も思っていたことです。それで、一九二〇年代あるいは一〇年代に芽生えた日本のモダニズム文化・モダニズム文学の表現というものが戦時下、あるいは占領下、あるいは戦時下の植民地・租界などに転載することによってどのように延命して、どのように変質したのかということを追いつめたい、というふうを考えて、今日まで来ました。

お題を頂戴した時に「いま悩んでいること」っていうふうに頂いたんですけど、そこ「レジメ」にも書きましたけど、わたくしはあんまり、頭でクヨクヨ悩む、っていうよりは、宿題に答えなければいけないとか、体を動かそうとか、動かして書くとか、っていうタイプで、そんなに、悩まない。悩まないというのは、自分の不勉強には悩みますけれど、状況に、さほどあれこれ考えたことはなかった、やるしかなかった。というふうにやってきたんですけれども、まあ、実家が震源地近くで、震度7のところだったりして、それで家族を引き受けたり、介護したり、看取ったり、またまた病人が出て介護したり、実家を売ったりとか、すごくいろいろなことが立て続けに起きて、わたしにとってはまだ終わっていない、「三・一一」です。そのときに、それまではわたくしは割合、論理的にはアクロバティックで、空中戦を得意とする物書きだ、というふうに皆さんに思われていたようなんですけども、そういう言葉が、——出て来ない。エッセイとか頼まれると、家族のことと猫のことしか書けないような時期があったりして、まあ、未だにそうはいつでも空中戦だよっていう方もいらっしやる

かも知れませんが……理論的な追求とか、テクストの分析、精緻な読みの自動運動とそれから一方では文芸批評界・研究界のいわゆるゼロ年代の世代の人達の思いつきのような、逆張り論というものに、いちいち腹を立てていまして、いつのまにやら保守派になったのではあるまいか。そういう迷いが出てきました。いままでの方法とは違う書き方でなければ言葉が出ない。どうやって言葉を出そうかっていう、苦闘の時間がありました。

そのときわたくしを救ってくれたのは一つは共同研究。これは雑誌『新青年』の研究を始めた頃から、ですから八〇年代の終わりぐらいから、ずっとメディア研究とか、テーマ研究などではジャンル横断的に、複数の方たちと一緒にの時間や、一緒に場所というものを設定して研究することを、積み重ねてきました。今、わたくしが根拠地として、運営者として、かかわっているのが、早稲田大学の二〇世紀メディア研究所、プランゲ文庫のデータベースですとか、プロバガンダ、それからインテリジェンス——情報戦、諜報戦ですね——、それから検閲などの学際的・国際的な共同研究をしているグループです。「三・一一」のあと本当に、定期的な共同研究の場に出ることはかなりしんどかったんですけども、そういう中に身を置くことで、どこかしら励まされて、マスメディアの情報の信頼の置けなさ、わたしは風評というのはメディア情報の無根拠性に責任があると思っている公式見解への不信感だと思っているんですけども、その、自分が目で見て、震源地近くで見て、聞いて、問題だと思っていたことが、どんどんマスメディアの情報のなかで押し潰されていくこと、それにとっても危機感を持っていましたので、アカデミックな共同の場を持つ

ていたというのはとても幸福なことでした。それからわたくし自身もそういう民主主義を怠けていた、っていう反省があったので、書は捨てないけれども街に出よう、という試みは、自分を励まして、なんとかいたしました。

その過程であらためて思ったことですけれども、日本は戦争中の様々な公文書資料を敗戦時に焼き捨てたと言われています、廃棄したとか。あらためて思いますですがその、「三・一一」の後、気づいてみると、未だに文書というものを勝手に捨てたり隠蔽したりしている政府である。無くなったとか、いやまた出てきたとか、そういうことをやっている社会に自分が身を置いていることに気づかされました。文(「ふみ」としての史(「ふみ」といった、文書としての歴史性というものが、いままさに危ないということにも気がつきました。その前後から、少なくとも一年のうち一ヶ月かそれ以上か、ワシントンの米国公文書館アーカイブやプランゲ文庫などで、資料を見たり考えたりする時間をもっていたのですけれども、——アメリカは歴史的な時間の浅さに対して、公文書というデータによって伝統を作る、伝統を保管するということを徹底的にしている。戦後・占領期研究、あるいは冷戦期研究で、日本の中で残されていない資料を、アメリカで見つけると、やはり、思うのは、何時の日か、まあこのままだとじきにそうなってしまうかも知れないんですけども、こちらの文書を残して持っている人達の方が、例えば日本研究、日本文化・日本文学研究でも、自分たちは正統なドキュメントを持っている、アーカイブを持っていて、ということになりはしないか、と思うようにもなりました。

現代の一次資料研究、実証研究というのはかつてのように資料

を受け渡していただく、秘伝のものとして上から頂戴する、というふうな、そういう学問的、あるいは人脈的なものではなくて、データベースやアーカイブを横断的に読み解いていって、自分なりに、資料空間というものを思い描く、そして創り出すという——そういう生産的な仕事だろうと思っております。その中で、占領期研究などでも、プランゲ文庫ですとか、アーカイブの資料をよく使います。

ところでプランゲ文庫研究は、プランゲ文庫が今年公開されて四〇周年ということで、メリーランド大学で特集展示をしたんですね。そのテーマで、わたしはこれを見たときにちょっとぞっとしたんですけども、‘CROSSING THE DIVIDE’というテーマで、おそらくこれ(レジメ掲載の特集展示ポスター)は基地の日本人女性のメイドさんが、おそらく将校クラスの白人の子供のベビーシッターをしているという、そういうお写真だと思っんです。それで基地、あるいは占領の過程に、分割を越える、文化的なにかができた、あるいは、絆ができていた、展示をしている。実際見に行った方で、これまでの、日本での占領期研究をしていた方たちは皆衝撃を受けたり、悲しんだりして帰って来ています。つまり、プランゲ文庫は、占領期にGHQ/SCAPの非公然の部門であるCCD(民事検閲局)に提出された出版資料からなっているわけですが、プランゲ文庫四〇周年の記念展示は、その検閲について一切言及していないということです。

日本人が、日本研究、日本文化・日本文学研究、あるいは占領期文学研究の特権的な主体でなくなるということは、こういう形で資料の扱いに関しても、歴史観につきましても進行していま

す。「プランゲ文庫は拉致資料じゃないか」と申し上げると、一方で怒る人がいて、「でもこの資料、日本に置いといたらあつという間に散逸するか、誰かが焼き捨てていたよ」などと主張する方も人いらっしやいます。そういう現在、そもそも近現代日本文学研究における一次資料とはなんなのだろうかと、これも、最近考え込むことの一つです。長くお話ししました。

3 飯田祐子「ジェンダーとクイアについて」

飯田です。よろしく願います。これまで、ジェンダーという切り口で仕事をしてきましたが、わたしの話は、川崎先生の言葉でいうと、空中戦に近いようなことになるかもしれません。とはいえ、自分の実感としましては、学術的な関心というだけではなく、自分自身の問題も持ち込みながらずつとかわつてきました。今日は、最近考えていることをお話ししようと思つています。

はじめのスライドは、皆さんもご存知だろうと思う『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』（ひつじ書房、二〇一六）からの引用で、わたしが担当した「ジェンダー」という項目の一部分です。これを書いたときにはですね、真ん中あたりにあるように、ジェンダー研究では「男と女に二分されてきたこと」や、「さまざまな生物学的な身体特徴のなかで、性を構成すると考えられているものが特異に強く意味化されているということが問題化された」とまとめたんですが、このときわたしの頭のなかにあつた前提は、ジェンダーについて考えるときの出発点は、男と女という一対の枠組みだということでした。その上でそれがどう機能し

ているかを明らかにしていくことになるかと考えていたわけです。

その具体的な展開としては、「男」の中の複数性とか「女」の中の複数性という問題など、男と女という二項対立が単純で固定的なものにとらえられてしまふのではない視点で、ジェンダーについて考えたいと考えてはいましたが、それでも、男と女の二項対立というものが、自分の中ではすくく大きな前提になっていたと思うんです。しかし、いまでは、LGBTという四文字でよく知られてますように、ジェンダーは二つに分かれているわけではなくということですが、広く語られるようになっていきます。例として、次のスライドに三つの雑誌の特集を拾ってみました。二〇一七年から二〇一八年くらい、割と新しいものですけども、『ナショナル ジオグラフィック』（二〇一七・一）では「ジェンダー革命」という特集です。表紙には、バイジェンダー、トランスジェンダー、インターセックス、アンドロジナスなど多様なアイデンティティを持つ人々が並んでいます。その中に異性愛の男性も含まれています。真ん中のものは『美術手帖』（二〇一七・一）で「ジェンダーイズオーバー」、つまりもうジェンダーは終わっているというように言い方になっていて、さまざまなアートでの実践が紹介されていました。三つ目の『日経サイエンス』（二〇一八・八）の特集でも、トランスジェンダーの問題やセクシュアリティの変化などが語られていることがわかると思います。これらの特集は、ジェンダーやセクシュアリティの多様性を論じたもので、——もちろんこれだけじゃないですけど——本当に、わたしたちが生きている現実の方はどんどん動いていて、男と女の二項対立でものを考えていたら見えないことが、たくさん見えるように

なってきたいます。にもかかわらず、わたし自身は、相変わらず男と女の二項対立という枠組みの中で考えてきたんだなということとを、このところ身に沁みて感じてきたわけなんです。

次のスライドでは、「ジェンダー」と「クイア」と「LGBT」と三つを並べました。昨年『昭和文学研究』（第七七号、二〇一八・九）で「クイア・リーディングとは何か」という特集に参加させていただいて、そのときも学ぶところが大きかったのですが、その際の話題を振り返ってみても、「クイア」というとセクシュアリティの問題、異性愛中心主義の問題が主として問題化されてきたのではないかと思えます。「L」と「G」と「B」はセクシュアリティに関わる概念で、現在の主流となっている異性愛が批判の対象になります。しかし、「T」で示されたトランス・ジェンダーの問題も、もちろん「クイア」の問題には入っていません。セクシュアリティというだけではなく、ジェンダーの多様性が問題になる問題系もあります。「クイア」というと異性愛中心主義を批判することが多いのではないかと思えますが、それだけではないということです。

ジェンダー研究では、さきほど話したように、男と女の二項対立がどういうふうな機能しているかとか、あるいは男性性はどういうふうな構築されているかとか、女性性はどういうふうな構築されているかとか、女性はどうのように差別されているかとか、そのような問題が問われてきました。もちろん、それらの問いは重要でないわけではまったくなくて、今もジェンダーの中の「男」と「女」の非対称性は非常に大きい問題なので、これからもこれらの問いを立てる必要があります。けれども、一方で、「男」と

「女」だけでは全然整理がつかない問題があるということと照らし合わせたとき、わたし自身がしてきたジェンダーについての文学研究は、ジェンダーの二項対立を前提にしているもので、それを再生産してしまうともいえます。これまでの問いの立て方では、二項対立そのものを解体するような方向性にならない。そのようなジェンダーを強く感じるようになってきたわけなんです。

それで、これは宣伝なんですけれども、今さっき、石川先生から雑誌の特集を組んですごく勉強したというお話をうかがいましたが、『Junkie 超域的日本文化研究』という雑誌を名古屋大学の「超域社会文化センター」で——その前は「アジアの中の日本文化」研究センター、その前は、「近現代日本文化研究センター」という名称でしたが——機関誌として出していて、今年度の一〇号では、わたしが特集の担当者になりましたので、「ジェンダーズ」という枠組みを立ててみました。「ジェンダー」を複数化して男と女だけではない形でジェンダーについて考えるということをやってみたいと思って、考えたテーマです。スライドに、目次を示しました。表紙は、グラデーションが入って二色にならない色で、丸や四角などが交差するイメージになっています。いろいろな領域にわたって書いて頂きました（岩川ありさ、隠岐さや香、大橋崇行、飯田祐子、谷本千雅子・高島亜理沙）。わたしは村田沙耶香を取り上げて書いてみました。この特集は、わたし自身が、まだこの二、三年に過ぎないんですが、男と女の二項対立を再生産しない形のジェンダー批評にはどういう形があるのかということを考えながら組んだものですが、書いていただいたご論考はどれも興味深く、良い特集になったと思います。

『JunCure 超域的日本文化研究』はいままでずっと紙媒体で販売もしていたんですけども、デジタル化しましたので、皆さんにいつでも読んで頂けるようになりました。三月の末に出ますから、ぜひぜひ超域文化社会センターのHPからクリックして頂いて、「特集ジェンダーズ」を読んで頂ければと思います。

(<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/ics/juncure/>)

さて、そこで書いたことを少し紹介したいと思います。「ジェンダーズ」というテーマで考えてみようと思ったときに、最初に浮かんだのは村田沙耶香でした。村田沙耶香の世界について論じるときにどんな概念が適当だろうかと考えてみて、やはりトランスジェンダーの運動や思想のなかで練られてきた考え方に非常に刺激を受けましたし、学びもし、重要だとも思って、これをわたしなりに引き受けてみたいと思いました。

次のスライドに二つの概念を示しました。一つは、ジェンダー・アウトローです。ケイト・ポーンスタインが示した概念です。ポーンスタインは「ジェンダーの流動性とはかかる時間を問わず、また変化の程度を問わず、自由に、自覚的に、無限に存在するジェンダーの中からひとつ、あるいは複数のそれを選ぶ能力のことである」と語っています(ケイト・ポーンスタイン『隠されたジェンダー』原著一九九四、筒井真樹子訳、新水社、二〇〇七)。つまり、男か女かというジェンダー観で全くないんですよね。そして、ジェンダレスでもないんです。複数化していこうという発想です。ポーンスタインはトランスジェンダーの方ですが、「男なの? 女なの?」と聞かれたら、「イエス」とただ答える。それ以上のことはもう答えないと語っています。「ノー」ではな

いんですよ。「イエス」といって、あとはもういろいろあるということ、その「イエス」のなかに含み込んでいるわけです。

もう一つ出会った概念というのが、ジェンダークィアという概念です。日本語では、ジェンダークィアについて書かれているネットの記事などがありました。書籍での用例が拾えなかったので、英語の文献を一つ示しました。これは二〇〇二年刊の『ジェンター・クィア』と題されたアンソロジーです(Joan Nestle, and Clare Howell, and Riki Wilchins (ed.), *Gender Queer: Voices from beyond the Sexual Binary*, Los Angeles: Alyson Books, 2002)。ですからとりたてて新しい概念ではないわけですが、ジェンダーをクィア化して考えることが提示されています。これもまた、トランスジェンダーを中心とした概念ですけども、それだけではない、いろいろなノンバイナリなジェンダーを含む概念として流通している用語です。ジェンダーの多様性に対する認識を抜けようというところで使われているんですね。村田沙耶香の世界における特異な展開について考えるときに、これらの概念を足場にしました。

わたしは、村田沙耶香の作品が率直に言って好きなんですけども、その中から、『ハコブネ』(二〇一一)とか『コンピニ人間』(二〇一六)とか『地球星人』(二〇一八)について論じました。『ハコブネ』には「大好きな人と性別を脱ぎたい」と願う里帆という女の子や、地球とセックスしようとする知佳子という女性が出てきます。それから『コンピニ人間』はジェンダーの問題を扱った作品としてはあまり読まれていないのですけれども、たとえば最後に「コンピニ店員という動物であるわたしにとってはお

あなたはまったく必要ないんです」と、主人公の古倉恵子が白羽という男に言い放つとき、「結婚」や「出産」を強いられる女性ジェンダーの問題が、はつきりと問題化されています。村田沙耶香は、コンビニという空間にはジェンダーがないとインタビューで話していますが（「世界を肯定する場所へ」『新潮』二〇一三・七、など）、ジェンダー規範の破壊が目指された小説だと思っています。また最も新しい長編小説の『地球星人』は、「結婚」でありながらも異性愛規範からは大きく逸脱した二人の関係が書かれています。「地球星人」というのは、異性愛規範によって構成されたこの世界の人々を指しています。「地球」の規範に沿わない主人公たちは「宇宙人」を自認しています。彼女たちが異性愛の強制を潜り抜けるための「アイディアを発生させて生きていく」という小説で、物語の終盤には「結婚」も、また二人でつくる関係もやめて、三人での関係をつくっていきます。最後は、「いまはそうではなくとも、あなたにもきつとこの形のあなたが眠っている、きつとすぐに伝染しますよ」と閉じられています。ぜひ伝染したい、またどんどん伝染すればいいなと思います。

さて、というところで、ジェンダーについて考えるときに、「男」と「女」という二元論を批判することが大切だということを、今日はお話したいと思って来ました。もちろんこれからも、男性性の問題、女性性の問題、「男と女」という文化的記号の問題も扱っていくかと思いますが、その根幹に、二元性を再生産しないということ置いて、これからもジェンダー研究を進めていきたいと思えます。以上です。

4 金子明雄「文学／文学研究における「正統」と「正当」のあいだ」

立教大学の金子と申します。よろしく願います。今日の私の話は、文学そのもの、あるいは文学研究における正しさの質の問題にするものなのですが、その点について「正統」「正当」という二つの漢字表記を並べて構図化してみました。「セイトウ」という言葉を使うとき、「正統」「正当」とちらの書き方でも許容されると思うのですが、現代日本語の語感でいうとどちらも十分にこなれていない印象を受けます。もともと「正統（シヨウトウ）」という言葉があつて、系統の正しさとか、嫡流などという意味合いで使われてきました。『神皇正統記』の「正統」ですね。日本語史についての知識があまりないので、どなたか詳しい方に教えていただきたいのですが、後にそこからの転用で Legitimacy の翻訳語として「正統性」が使われたのではないかと思います。Legitimacy は政治学的な用語で、権力がそれなりの制度的裏づけを持っている状態を指します。明治維新のときの「錦の御旗」とか、現代なら選挙の結果としての議会内多数派のようなことです。ですから「正統性」というのは、もともと血統とか家柄とかに深く関わる事柄であつたりするわけですが、近代になって、世の中血統だの家柄だのではないだろうという状況が進むなかで、何らかの外部的な要素に裏打ちされた正しさというニュアンスで使われるようになったのではないかと思います。Legitimacy の類義語として Orthodox とか Conventional といった言葉が浮かびますが、「従来」「月並みな」「平凡な」など、今日では否

定的ニュアンスと結びついてしまう面もあるようです。その一方で、AuthenticとかGenuineあることはReal〔本物の〕「本当の」「真の」など、外部的裏づけではなく、本質的な正しさと結びつく類義語の系列があつて、JustとかFairとかProper（道理に適用）「公正な」「適切な」など、やや口語的ともいえるような語とも繋がっていて、「真つ当」とか「まとも（正面、真面）」とか、日本語としても口語的な表現と親和性の高い意味領域が形成されています。そちらの意味に寄せたい場合、「正統」ではしつくりこないで、「正当」の方を選ぶ傾向があるようにも見えます。ですが、これは学問的に厳密な分析とはいえないかもしれません。現状として「正統」と「正当」のどちらが優勢かなどということはまだたくわかりませんが、外的な要素に依拠しない内在的な（本質的な）正しさを求める発想が、一定の位置を占めるに至っていることは確かであり、そのような正しさの「本質性」こそが、私にとって、今気になっていることです。

近代文学研究の領域を見れば、ある時期に研究を支えていた「正統」な文学史的枠組が消滅してしまい、文学に関わる歴史的記述について、何が文学の歴史の幹で、何が枝葉（末節）なのかの判断基準も曖昧になってしまいました。それに対応して、文学研究自体の系統性も後景に退いてしまい、テキスト論とか、ポストコロナール批評とか、カルチュラル・スタディーズとか、言説分析とか、ある時期に前景化された研究概念や方法論はあつたにせよ、それらが「正統」なものとして認定され、実際の権威を發揮したなどという局面は、あらためて振り返ってみても、ほとんど認めることができなと思います。いまのところ、私たちは、自

分たちの研究に何らかの正しさがあつてほしいという願望、それだけで頑張っているところがあるように見えますが、文学研究の「正統性」に代わる「正当性」について、つめた考察をしてきていないことは確かでしょう。今日は、その点について私個人がこれまでどのように考えてきたのか、私の書いた三つの書評をお示しすることで、文学あるいは文学研究における「正当性」について考えを深める素材にしたいだこうと思っています。

一つ目はみなさんの先生である日比さんの「本の書評です（『日比嘉高著『自己表象』の文学史——自分を書く小説の登場——』『日本近代文学』第67集、二〇〇二・一〇）。私は実は書評を書くのが結構好きです。論文だと記述の対象から論じられることの範囲が自ずと決まってしまうので、好き放題のことは書けないのですが、書評の場合は、もちろん対象はあるのですが、既に一定程度共有されている内容が前提になるので、思いきって自分の興味関心に引きつけることが可能になる気がします。この書評は、自分としては結構批判的に書いたつもりだったのですが、読んだ人からは高い評価を示しているという感じの反響が多かったものです。批判のポイントは、従来の文学史言説の脱神話化についてはうまくいっているが、書かれた（読むことのできる）資料だけに限定した論証手続きの堅実さ、周到さは、生起している事柄の広がりや重層性を取り逃がす危険性を孕んでいるのではないかとということです。従来の文学史記述の脇にオルタナティブな回路を設定する意義は認めるが、論証手続きそのものとしては、チャブ台返しではなく、むしろ「正統性」を志向しているように見えるという批判です。もっと書かれていないことを読んでもよ

いのではないかと誘いといえるかもしれません。

その後、二〇一〇年に五味潤典嗣さんの最初の本の書評を書きます〔五味潤典嗣著「言葉を食べる——谷崎潤一郎、一九二〇—一九三二」』『日本近代文学』第83集、二〇一〇・一一〕。この書評は、書いた本人としてはそれほど思っていないかったのですが、周囲の人から見ると非常に辛辣な批評と思われたようで、「タコ書評」と呼んだ人までいました。私として何が問題に感じたかという点、「谷崎作品と時間的・空間的に隣接する他の言説領域」とを重ね合せ、さらにそこに時間的にも空間的にもかけ離れたより今日的な言説構造を読み込んでいく方法」、つまり時間的・空間的に離れている二つのものを重ね合わせるやり方の中で、「今日の状況」を小説に読み込もうとする論者の問題意識」が前掛かりに働き過ぎると、今日の意味を読み込むことが自動化されてしまつて、それが可能になる条件である小説それ自体のあり方と、それを読みたいという「正当」な問題意識が癒着してしまい、ある種の循環論法に陥る危険性があるのではないかとこの点です。それが書いてあるから読めるということ、それを読みたいから読めるということが、具体的な検討なしに連携してしまうのではないかとこの危惧でもあります。憶えている方は少ないかも知れませんが、この年にサッカーのワールドカップが南アフリカで開催されていて、タコのパウル君が次々と試合予想を的中させるといふ事件が起きていますね。それで調子に乗ってタコの予言が当たるとはどういうことかという話になって、文学テクストがタコのパウル君になっていくという論法になり…、大変に辛辣な言い方になってしまったのは確かです。

ただ、言い訳がましいかも知れませんが、これはこの本を高く評価した結果なのです。大変興味深く感じたゆえに方法的側面を厳密に検討したいと思つたのです。そのために書かれている内容の評価というよりは、方法的な可能性についての言及になつてしまったのですね。ですから五味潤さんには非常に申し訳ない気持ちがあります。——ついでに申し述べておくと、書評の着想の元になつている曾根博義さん（書評で引用しています）も、タコの話ではなくて、二つの違う要素をつなげるという話について、それを書いたことについてすこし気の毒なことをしたと思つていると仰つていました。もちろん、その後五味潤さんは大活躍されているので、今頃何をいつても関係ないと思いますが、この書評では「真つ当さ」（正当性）ということですね、それが孕む危険性について、私なりの応答が示されたということになります。

三つ目は、ごく最近出た、金ヨンロンさんのご本の書評（金ヨンロン著『小説と（歴史的時間）』井伏鱒二・中野重治・小林多喜二・太宰治』『社会文学』第49号、二〇一九・三）です。この本の方法的にも五味潤さんの著書的方法論と重なる部分があつて、「時間的に距たりのある二つのテクストの差異に、現代におけるわれわれの生とも関連する歴史の出来事の媒介性を読み込むことによつて、二つのテクストの非連続性を連続させる手法」と説明しています。しかし、こちらの場合は比較的好意をもって記述している印象が生じているのではないのでしょうか。一〇年近く経るとそうなるという話でしょうか。ポイントは、私自身が「預言」といふ言葉を使って方法的に受け止めようとしている点にあります。先のパウル君と同様ではあるのですが、小説がその後

に生起することを予見していたかどうかの事実が問題ではなくて、先に起ることを予言しているかもしれない言葉として文学テクストを「預かる」という、神の言葉を預かる預言者の役割（宗教的なニュアンスが感じられるかも知れませんが、特定の宗教思想を意識しているわけではありません）を念頭に置いた概念を提出しています。もちろん作家ですから神ではなく人間なので、作家（他者）の言葉を預かって、それを自分なりに解釈していくということの意味をどのようにとらえるか、まさに「預言」という機能・役割をどのようにとらえるかについての論理的課題を提起する書評になっています。ついでに述べておくと、五味渕さんと金ヨロンさんの書評書いた時、時間的に幅はありますが、「預言」という言葉をわざわざ使っているのは、『世紀末の予言者・夏目漱石』（一九九九年）あたり以降の小森陽一さんの一連の仕事が頭にあつたからです。作家（文学テクスト）が後世の事態を予言しているという考え方にながしかの方法論的な可能性を見出そうとした時に、解釈者が言葉を預かっているという観点を置いた上で、それではその預かり方をどのように方法論化できるのかということが、われわれの「真つ当さ」というか、われわれがやってきたこと、いまやっていること、これからやるうとしていくことの「正当性」を論理的に記述することにつながる間ではないかと考えました。単に権利とか義務のような言葉でいい募る（それはある種の特権性の発揚の危険があります）のではなく、理論的な記述を志していくことの大切さが、「正統」と「正当」のあいだについて、現在の私がいじみじみと考える中心点となります。時間が来ましたので、このあたりで。

5 日比嘉高「〈物〉と〈知〉をどうつなぐか」

日比嘉高です。配布資料は一枚です。「物」と「知」をどうつなぐか」というタイトルで、最近取り組んでいる書物流通研究と文学研究とをどのように交差させるのかをめぐってお話してみたいと思います。レジュメを少し読みます。「書物はいかなる仕組みによって流通し、いかにして人の文化的活動と関わったのか。書物とその流通の物質性に力点をおき、書物流通と小売販売の歴史を実証的に明らかにしつつ、同時に、物と知をつないで考える筋道を作りたい」。本は、物なのか知なのか、というのがさしあたりの問いです。両方だろうとは思いますが、その両方を跨いで考えるような、そういう問いは立てられないだろうか。それがここで話そうとしていることの核です。

書物流通研究を、物質性に力点を置いて考えるということについて、具体的に話を進めます。書物の流通研究を非常に乱暴にまとめれば、創作したところから読者の手元に届いて本を読むところまでという、その間のプロセスについて考えることなのだろうと思います。本なり雑誌なりが作られ、運ばれて、届き、読むという、その過程を扱うということです。

そのそれぞれの局面において物質性というものがある、と考えられます。整理のために、「フロー」と「ストック」という発想から整理してみます。そもそも本の動きにもさまざまな側面がある。それを流れていく流通の部分と、留まっている所蔵や在庫の部分というように分けてみる。それがフローとストックです。そして、創作、出版から流通、小売、読者へというフローの局面で、

	創作～	出版～	流通～	小売～	読書
フロー	(紙・筆記具)	(印刷・造本)	(運搬・配本)	(仕入れ・販売)	(読書装置)
ストック	(原稿・個人蔵書)	(紙型・版元在庫)	(取次在庫)	(店頭在庫)	(個人蔵書・図書館)

表 書物流通のフローとストックに関わる物質性 (当日配布のレジュメより)

それぞれに物質性がある。また、ストックの場面においても、物質が関わっているのではないか、というのがレジュメに整理したことです(表)。

物から見ていくことによって、発見できることがあるはずだというのが出発点です。わたしは国内に限定した研究ではなく、外地と内地を結んだネットワークに力点を置いて研究を進めてきました。

結ぶ、すなわちここでは本を運ぶことになりませんが、そういう業者を取次といいます。取次と、それから町の小売書店の研究をしてきました。明治期から第二次世界大戦までのその歴史的な変遷を追いかけてきました。

外地向けの取次書店には、大阪屋号書店などといった大手の業者がありました。また外地の大都市には大規模な小売書店もありました。台北だったら新高堂、京城なら日韓書房などです。これらについて、各種の記事や、名簿、組合の関係資料などを用いて、どの都市に何年頃、何軒ぐらいの本屋があったのかなどを調べて、ある種のマッピングを行い、その歴史を書くというわけですね。ネット

トワーク論や空間論を援用することを意識しながら、これをやります。こうした作業の先に、外地内地を結んだ書物の流通と小売の研究書が一冊書けるのではないかと考えてやっています。

さてそれで、そのようにして行った地道な実証研究を、その先のステップにどのようにしたらつなげるか、別の言い方をするとそういう実証研究をより広い形で読んでもらう、より広い形で利用してもらうためには、どういうつなぎ目を作った方がいいのだろうか。そんなことを、最近よく考えます。

つまり、本屋の店主がどういう方であつたかというところを整理して示せば、どこにどういう本屋があつたかということを整理して示せば、ああ、それは興味深いですね、そういうリストや地図があれば便利です、ね、と思ってくれる方——たとえば植民地文化に関心のある方など——もいるとは思うのですけど、さらに広く関心もってもらうためにはどうしたらいいでしょうか。これはわたし自身の研究の背景がそう考えさせていることもあるでしょう。つまり、わたしは文学研究から出発しているので、文学研究と出版流通研究を架橋する作業がしたくなる。

しかし現状では、それがさほどうまくいっていると思えない。その突破口の一つを、書物流通の物質性に見ていけるのではないかと、というのが私の現状のアイデアです。本とその流通の物質性に着目することが、知——文学ももちろん含む——についての研究にインパクトを与えうるのか、それを考えてみたいのです。

たとえば、物について着目すると、人が移動する移動の仕方と、物が移動する移動の仕方が違うということに気づきます。人はたとえばバスポートをもち入国管理の法規に従って国境を越えます

けれど、本は箱に詰められて輸出入の法規に従って税関を通りま
す。そのように統制する法がそもそも違ったりします。あるいは、
人はせいぜい八〇年、九〇年しか生きないですけれども、物、本
はもつと長生きです。このように人と物とは、それぞれ移動の軌
跡であったり、集積や貯蔵のされ方であったり、制御する法規で
あったり、ネットワークの組成であったり、が違うわけです。

ただし、本は勝手に動きませんので、人が運ぶ。そうすると当
然ながら、人の移動と重なる場所も出てきます。たとえば日本
が戦争を起こして、植民地を獲得する／しそうになると、鼻の良
い商人たちが出掛けて行って、そこに店を作る、というのがよく
ある近代の植民地主義的な商圏拡張のパターンです。台湾が領有
される、すると早速商人たちが台湾を目指していく。たとえば後
に新高堂の創業することになる村崎長昶という人は、台湾を領有
する式典が行われたその場に、ちゃんと居合わせるようなタイミ
ングで台湾の港、基隆まで来ているわけです。商売の利を嗅ぎつ
けて、本屋が行って、本を運ぶ。兵隊が行ったら兵隊向けの本を
運ぶ、そんな具合です。

だから人の移動と本の移動というのは重なります。重なるのが、
当たり前前の発想です。それを、物質性に着目することによって、
別の動きも見出すようにしてみたい。たとえて言えば、波形の違
いのような。人が描く波と、物が描く波というのを、見分けたい。
そしてその重なりと異なりに、目を凝らしたい。こうした発想で、
書物流通と、そしてそれが担った知の、多層のネットワークが説
明できないか。人のネットワークのレイヤーと、物のネットワー
クのレイヤー、知のネットワークのレイヤー。そのそれぞれが多

層である、というふうには。レイヤーを分類し、そのそれぞれの動
態を説明し、かつその連関のさまを語ることによって、人と物と
知の相関のグローバルな見取り図を描きたい、そんな野望です。

このとき、今日冒頭で投げかけた問い、本は物か知かという問
題の構成が、一つの蝶番になってくるのではないかと思います。

本は、やはり面白いですね。本は、紙の束とインクの染みなんだ
けれども、そこに人が関わり、読み解いていくことによって情報
が導き出され、知が立ち上がるわけです。午前中の発表で、本の
身体性を語る今福龍太さんの言葉が言及されていました（「身
体としての書物」）。本が同一性を失ったとしても、本文の同一性
を失われなかったりすることもあるわけですから、いろいろ複雑
で面白いですね。本を考えれば、物にもいけるし、知にもいける。
両方を跨げる。このあたりが突破口かなあと思っています。

こんなことを考えながら、最近気になっているのが、「新しい
物質主義 new materialism」という潮流です。まだ勉強中なので
すけれど、この発想は物質性を重視して、物にかえていく方向
性です。そのときに社会／自然とか、文化／自然というような、
二項対立的な構図を棄却しようとする。人の問題と環境の問題を
分けて、一体化したものとして考え直そうとしたりするわけです。
「ポスト・ヒューマン」や「新人世 (Anthropocene)」などの問
題意識と通じているところもあるらしく、それも面白いのですが、
私自身は今こういう思想的な流れの全体を追いかけるつもりもな
いし、新しい理論として導入したいというつもりもないです。た
だ、問題意識としてよくわかる、という気がしています。つまり、
物と人を分けなにか、人と環境を分けなにか。分けて、一体化

した状況もしくは生態系のようなものとして考えていこうとする。そういう思想はやはり現代を生きる感覚として、ふさわしいような気がするわけです。このあたりは、もう少し勉強しなければいけない、という段階です。

最後に付け加えると、文学研究につなぐなどというと、たとえば「それは作品の読みにどう生かれますか」なんて方向で考えがちなのですが、作品分析するというのがすなわち文学研究というわけではないのですよね。文学研究って別に形が決まっているわけではない。物と知をつないでいくときに文学を考える、そのとき作品の表現を分析するかもしれないけど、いわゆる作品論のフォーマットにそれが嵌まっていなくてもいいわけですよね。だから文学研究の形そのものも別に固定的に考える必要はないんじゃないかな、というふうに思っております。

発表は以上ですが、レジュメについて一言すると、QRコードを貼付けるという試みをしました。スマートフォンのカメラをかざすと、注1の書評（森啓輔・岩館豊・植田剛史「新しい物質主義的社会学に向けて——本質主義と構築主義を超えて」『書評ソシオロギス』一三号、二〇一七年。日本語で読め、入手が簡便で、かつ丁寧はこの分野を概観した記事である）がダウンロードできます。ちょっと新しい実験としてやってみました。



日比…先生方、ありがとうございます。いろんな論点が出てきて、それぞれ興味深いものでした。いくつか議論の焦点になりうる場所があると思うのですが、一つは資料ですね。資料をどのように扱うのかという問題がありました。資料をただ単に集めればいいのか、「古本屋のおやじだ、それじゃ」という厳しい突っ込みから始まりましたね。じゃあ、そもそも一次資料って、なにか。その資料の大事さ、みないな話もありました。現在の公文書の管理の杜撰さから跳ね返って、我々はいまどういう風に資料を扱うのか、そして誰がその資料を扱うのか、という問題提起もありました。我々の資料の扱い方もデータベースの利用へと変わりつつあったりしますが、そのデータベースからなにを思い描くのか、作り出すのかという川崎さんからのお話もあり、非常に印象的でした。もう一つは、文学史の問題があるだろうと思います。「文としての史」が危ないというような話もありましたし、金子さんが文学史にかかわる書評三つを取り上げながら、真つ当さというものが持っているある種の本質性に対する距離感について語られました。そういうった危うさを念頭に置きながら、歴史を書くときにどういう風に正しさを主張したらいいのか。なにを根拠にその正しさをいうのか。そういった批判的な問い返しをしてくださいました。歴史を書いていくときに、ある種の構造を利用して、配置していく。その時の道具立ての話もありました。

たとえば飯田さんからジェンダーに関して、男と女という対比で考えているけど、それはもっと複数化する必要があるだろう、という話題でした。そういう対立でいうと、わたしが最後に申し上げた、物と知、人間と環境、自然と文化などという二項対立的図式も考え直してはどうか、そんな提案が色んな方面で出ているのかなと思っています。それから、研究者の役割についての話が石川さんからありました。文学史を書くというのもそうだし、データベースを作るというのもそうだし、ある種の批判的な投げかけをするっていうのもそうでしょう。こうした問題を起点に、いま人文知というのが、どうあるべきかという問題も論じられるかもしれないと思います。それでは前に座っている教員だけで話し合うのではなく、会場全体で話し合うことで進めていきたいと思います。

仲井眞…立教大学大学院の仲井眞建一です。主に日比先生への質問になります。他の発表者の方々の中でも少し出てきた、

読む態度、及びそこから何を引き出すか、ということについて質問したいと思います。たとえば、飯田先生が、言葉を何度か変換して、これでいいのか、これでいいのかっていうふうにしてジェンダーズっていう言葉を見つけて出して、それでまた思考をしていくっていう方法と、また金子先生が読むことによって預言、予感を読み解く読者の主体っていうものを述べていたと思います。この流れでいくと、日比先生が仰る「知」っていうのは、一体そこに、どういう読む態度が要請されるのか、またそれによって導き

出された「知」の範囲というか、その「知」の射程をどのように想定しているか、教えていただければと思います。日比…わたしが述べている「知」というものが、具体的にどうい

うものかというところから答えてよいですよ。具体的なイメージがあるわけじゃないんですが、色々な「知」の形があります。たとえば外地の方だと大学がきたりとか、図書館がきたりとか、外地の文壇がきたりとか、日本語教育がされたりとか、あるいは外地に対する学習調査が入ったりとか、文学以外にもいろいろな取組みがなされてきました。もちろん、もともと朝鮮半島にしても中国大陸にしても台湾にしても樺太にしても、そこには現地の住民がいたわけで、それぞれの知的な活動というもの積重ねがありました。その長さ、濃さ、深さについては、グラデーションはあったにしても。そうしたいくつもの取組みや活動の蓄積の総体を「知」と呼んでいます。ですから、まあちよつとほんやりした概念ではありません。それで、そのどこに光をあてるのかっていうのは、光を当てる側の研究者のある種の読み、というものがかわっているかもしれないな、という風に思います。

仲井眞…ありがとうございます。

石川…「知」に対する研究者の取組みということで、この場を借りてぜひ金子さんにお訊きしたいことがあります。先日、いま質問をした仲井眞君と雑談をしていたところ、「金子先生の論文を読んで勉強したいと思うことが多々あるのですが、金子先生は本を出していないのでひとつひとつの論

金子

文を探すしかなくて、いつも困るんですよ」と言っていました。また、今日の発表で金子さん自身からは「私は書評を書くのが好きなんです」というお話しがありました。金子さんの書評は、ある意味、辛辣でありながら対象となる本の魅力を引き出そうとする批評性に溢れていて、「よくこんなに読み込めるなあ」と思うのですが、金子さんご自身は自分の研究を本にまとめるという行為についてのどのような考えをお持ちなのでしょう？ 自身の研究に関する基本的な考え方をお話しただけませんか。

本にまとめないのはただ怠け者だけなんですけれども、ちよつと真面目な方向に話を持っていくと、先ほど「言葉を預かる」と言ったんですが、逆に言うと、言葉を常に他人のものと思いたいのですよ。だから、自分の本を出す際の「自分の」というニュアンスに、何か意欲を失わせる要素があるのです。たとえ自分の言葉であっても、他人のもののように扱いたいのです。自分の身体の中に他人の言葉を入れるとか、他人の言葉を借りるとか、そのような相互的な遣り取りの感覚が大切な気がします。安定した「自分の言葉」にしてしまうと、書いたり読んだりする際の「遣り取り」の感覚が失われる気がするのです。他人のものだから少し大事に扱わないといけない、遠慮もしなければいけないというような隙間の空いている感じがあるのだけれども、同時にとても身近なところから発せられている感じもするという微妙な距離感が、書いたり読んだりする行為の土台にあるように思います。ですから、既に物と

して存在している書物を扱うのは問題ないのだけれども、「自分の」書物を生み出すという感覚は、他人のものを自分のものにしてしまっているような違和感がぬぐえないのです。

石川…ありがとうございます。

日比…川崎さんはデータベースの整備にかかわって来られていますね。プランゲ文庫の関係ですが、あれはマイクログロになっていたりとか、デジタル化されていたりとかする一方で、本物が書庫に集まっていたりするんですね。つまり本の形態の差が生まれているわけですが、そうした差を生んでいるのは、研究の潮流でもあるし、今の研究の環境でもあると思います。このあたりのことについて、プランゲ文庫と関わって何か考えてらっしゃったことはありませんか。

川崎…そうですね。やはり書物っていう紙の形っていうのは、私の実感が呑気なのかもしれないけれども、一番残る、コピーをいくらとつても、結構同じものを、文庫本でも同じものを何度も何度も買ったりするんですけど、どこに行っただかわからない、コピーも、あつ、どこかに行っただかわからない、PDFなども、あつ、どこかで見つけたか、もう一回ダウンロードとか。そういうことを考えると、書物がモノであるということはとても重い。しかも表現と関わる、装丁であるとか紙であるとかインクであるとか。戦後占領期の出版に関して言うと、時期によって、戦時中の方がむしろ良質な紙の時期があったのが、戦後しばらく経つともうポロポロの、触れれば零れるような紙になる。プランゲ

文庫などもマイクログロフィッシュ化して、ついでデジタル化を試みており、今行くと現物を簡単には見せてくれない。けれどもGHQ/SCAPの時代のCCD検閲というのは、複数の階梯があり、現場の検閲官は英語がよくできる大学生とか、外地帰りの人や英語の先生だったりする。その報告が上にあがり、処分の決定を下すのは、米兵の中でも日系二世であったり、あるいは日本語を学んだ経験のあるアメリカ人であったりする。その人たちが違うペンで検閲ゲラに書き込みをしている。赤とか青とか、黒のペンとか。で、それでその検閲処分資料にしても、上からの検閲マニュアルを当てはめた検閲だけじゃなくて、現場で最初にゲラを読む日本人検閲官が上に訴えるような、「これから日本は新しい時代にならなくちゃいけないのに、なぜこんなカストリ雑誌のエロが通用しているんだ」などと、これはビューリタンの教育を受けた学生の検閲官だろうかと考えされられたりする資料がある。ところが、今年プランゲ文庫40周年ということで、現在所蔵しているメリーランド大学で記念の展示が行われ、チラシが作られたりしています。先に言及しましたように、それが、日本人女性のメイドさんが、米軍将校の子供を抱いて、微笑んでいるという写真をフューチャーしています。プランゲ文庫は検閲資料にとどまらず、むしろ、日米の分断を越える資料だとアピールしたいのでしょう。けれども、占領期にはFRATERNIZATIONという検閲処分のキーワードがあった、日本人女性と米軍の将兵たちの関係を可視化するなど

いう禁止項目が、ずっとあったわけです。パンパンであるうと、国際結婚であろうと、強姦・レイプであろうと、とにかく日本人女性と占領軍関係者の男性との関係性を可視化するなど。ところがブラング文庫40周年が取り上げた写真を見ると、日本人のメイドさんと占領軍の男の子の写真という対のジェンダー表象には、日米の絆が表され、ブラング文庫資料には「分断を越えて」というメッセージが込められているなどと、新しい言説が作られてしまった。困惑してしまいます。すみません、脱線しました。

石川

私もモノとしての雑誌が大好きです。たとえば、カストリ雑誌を読みますと特定のページがバリバリになっていたり、糊でくっついたようになっていたりします。それは恐らく、たくさんの人が回し読みしているうちに特定のページばかり折り目がついてしまったり、指を舐めながらページを繰ったために紙がくっついてしまったりしたのだろうと思います。私はそういう読書行為の痕跡のようなものに強く惹かれます。雑誌を読むという行為は、当然、読者の身体性や彼らを取り囲む環境と無縁ではないわけで、資料としての雑誌はその内容はもちろんモノとして後世の人々に様々な情報をもたらしてくれます。カストリ雑誌でいえば、戦後占領期の時空間において、それがどのように享受されたのかという妄想が広がります。私はそういう妄想のなかに浸っているときにいちばん愉しい気がします。また、私自身は紙に印刷されたものをすべてにフェティッシュな欲望を感じます。活字にインクを塗りそれが紙に転

写される過程そのものが好きなかもしれせん。金子さんの言葉を借りれば、そこには、言葉を吸った人々の身体性が刻まれており、それを毀損させないかたちで次の世代に受け渡していくための媒体として雑誌が存在しているという感覚です。研究者としてその受け渡しに関わっていくというのは嬉しいことです。

日比

ありがとうございます。

加藤

立教大学大学院の加藤明日菜です。本日は貴重なお話、ありがとうございます。主に飯田先生にお伺いさせていただきます。ジェンダーの問題を考える中で、男女二元論でもその内実を拡張しようとした時に男の複数性であるとか女の複数性の提示をするのだけでもやはりそこにもある種の限界があって、それを乗り越えていくためのものとしてジェンダーアウトロー、ジェンダーの無限の複数化というものがあるとご説明されていたと思います。ですが、それも結局ジェンダーという枠の中でジェンダーの複数化ということになっていいるのでは、と私は感じました。これは人によって意見がかなり分かれると思うのですが、私自身はジェンダーという概念自体が拘束的なもので、それを無化してしまいたい、ジェンダーという概念、言葉からそもそも脱したいと考えるのですが、そのあたり飯田先生はどのようにお考えでしょうか。

飯田

質問していただいてありがとうございます。ジェンダーっていう概念は機能してるし、それからそれは欲望を生産する装置にもなっているわけだから、ジェンダーがなくなる

ようにと考えているわけでは、ないです。けれども、それを固定的でないような形で考えていきたいわけですね。だから、男性の複数性とか、女性の複数性というのを提示していくのはものすごく大事だと私自身は思っています。

限界があるというより、その提示は、男と女を非常に単純に二項対立化する考え方をやっぱり変えるための、いろいろある中の一つのやり方として重要な作業だと今も思っています。同時に、トランスジェンダーとシスジェンダーの対立というような望ましくない事態、男と女の枠組みではとらえられない問題もあるわけです。今日例にあげた村田沙耶香という作家が書いているのは、ジェンダーアイデンティティを特定するとしたら、女性自認のある女性で男性と「結婚」したりしてからです、シスジェンダー側の登場人物だと思っています。それを出して、なおかつジェンダーシステムに対する強烈な違和感みたいなものを書いているわけなので、与えられるジェンダー観に対する違和感というものシスジェンダー的な立場にいる登場人物であっても持つことがあるということ語るテキストです。その違和感はもちろんトランスジェンダーの方が向かい合っている問題と同じではないけれども、色々な、本当に色々な立場から、決められた「ジェンダー観」について考え直すことはできると思います。男と女を対立させて、その二つしかないように思い込ませてしまうような制度を問題化するために、いろんなやり方で考えていきたいなあと思ってます。とはいえ、先日、プロ文のなかにおける少女表象に

ついて発表したんですけど、やっぱり男性が書いたものと女性が書いたものがあまりにも違うので、考えている間にどうしてもすごく二項対立的になってきて、ああまたなっつてしまう、またなっつてしまうと悩みました。これをどういうふうな形でジェンダーの二元性を再生産しないジェンダー研究にしていけるのか、本当に今まだ考えながらやっているっていうところです。今突き当たっている問題という意味で、今日はお話しさせていただきました。さきほど金子さんがおっしゃったことにもつながると思いますが、自分がやっていることについて自己言及していくこと、自分の立ち位置とか参照している枠組みがどういうものなのかっていうことについて自己言及的になる必要があると思います。それから研究はどんどん書きさされていくと思うので、自分が書いたものも、なんかちょっとイマイチだったみたいなことがあっても、どんどん書きさしていくことが可能なので、そういう意味での預かり、過去の私からも預かってまた次というふうなプロセスの中に我々研究者はいると感じています。

加藤..ありがとうございます。

日比..金子さん、もしよかったら続きでジェンダーとか。

金子..確かにジェンダーの問題は、一方では、問題設定として、外からやってきた大抵の場合にどうしようもないジェンダー枠組に対して、人としてどのように対峙するかという点から逃れられない面があるのですが、しかしもう一方で、肯定的な可能性を含めたかたちでジェンダーのあり方を理

論的に突き詰めてみようという方向性もあると思います。その二つの方向性は発想スタイルからして全く違っていて、そこにある距離感の問題でありますよね。

飯田…あると思います。

金子…文学研究をしていく上では、過去の歴史的状況を振り返ってみても、その時々で男たちはとんでもないこと書いてるのは確かなので、いい加減厭きつつあるとしても、そこにとんでもないことが書かれていると言いつけられないという状況はあります。けれども、そのようなどうしようもない状況についてはそれなりの理解がなされてきた感じもあるのです、そのような状況を目に見る必要は全くありませんが、ジェンダーに関する理論的な思考方法を隣接する少し異なる問題領域に持ち込んでいって、その領域の風景を変えろというような可能性はあつたりしませんか。どうでしょう。

飯田…いま、プロ文とか社会運動系の文化のジェンダー分析やセ

クシユアリティ分析をしようと思ってるんですけど、公的な政治という大きな物語についてはジェンダー分析が不十分な面もまだあるのであれこれ考えているところですが、ジェンダーに階級の問題とか、大きな政治の問題に日常の政治の問題とか、いろんな問題を合わせて複合的に考えていくことが大事だろうと思っています。ジェンダーだけじゃなくて、ジェンダーが何と結びついているのかについていうことですね。さきほど川崎先生がポスターについて分析してくださいのも、ジェンダーと他の力学が結びつい

てつくられた事例で、「何と」っていうところをあぶりだしていくことは、ジェンダーについて考えるときに大事なことだなあと思います。書物とか雑誌とかという面でも、やっぱりジェンダーに関心があるので、女性雑誌はどうかとか、女性読者はどうなのかとか、そういう部分について知りたいと思っています。いろんなものを掘り起こしていくときにジェンダーをセットにしてもらいたいっていうことなのですが、そのときに、女性という問題だけじゃなくて無産階級の問題に、今は関心を持っています。社会運動の側面だけでなく、消費文化を論ずる中でも、無産階級の人たちはどのような消費をしていたのかとか、消費にどうコミットしていたかというようなことを考えてみたいのです。中心的な主流の消費文化だけじゃない、外側にはみ出していた部分をセットにして、今までの問題を組み変えたり、つけたしたりしていくことができるのではないかと、つけたたりすることも思うんですが、モノについて調べた石川先生はいかがでしょう。

石川…

モノについて語る前に、飯田さんと金子さんの遣り取りを聞いていて私がひとつ感じたことを述べさせていただきます。私はジェンダー研究に関しては不勉強なところが多いのですが、今日の議論のキーワードである「人文知」という観点からすると、「知」の最も大切な役割は人を自由にしてくれることなのではないかと思うわけです。知らないことは知るための努力をすればいいし、知ることによって私たちは新しい眼で世界を捉えることができるようにな

る。それこそが自由になることだと思えます。ところが、いま巷に溢れているジェンダーをめぐる議論というのは、むしろ、私たちの認識のありようを窮屈にしているかたちで作動しているように感じられます。運動としてのジェンダー論は必要だと思えますが、批評理論としてのジェンダー論に対してはどう関わっていくべきか躊躇するところがあります。たとえば、私は本日用意したレジュメに「うちの妻が……」と書いているのですが、正直なところ「妻」という表現を使っているだろうかと思ってしまう。あの人のことを何と呼べばいいだろうか？ と思うわけです。ネット社会の到来によって、ただでさえ、言語表現に対する規制が厳しくなっているなか、私としては、ジェンダーの問題を考えることで私たち自身が自由になれるような状況になって欲しいと切に思います。モノを通して研究するなかで、そこに階層性や生産／消費をめぐる社会構造のありようが浮かび上がってくるというのは飯田さんがおっしゃる通りだと思います。カストリ雑誌なんて、いかにも教養のない下層市民が欲望のままに読み漁った通俗雑誌だと思われるのですが、当時のカストリ雑誌はとても高価でしたから、食うや食わずの生活をしている人たちが簡単に入手できるものではなかったと思います。逆にいえば、懐に少し余裕のある人間が猟奇的なエログロの世界を享受していたということです。

川崎…あの、ジェンダー論というものが、アイデンティティ論の中でどんどん窮屈になっていたり、二項対立的になった

り、あるいはそれこそテクストの検閲者となるような構造になりがちです。ジェンダーと他の要素が交錯するところで生じる変容も、ジェンダーに還元されてしまいがち。私自身、ジェンダーの要素と他の要素が絡まっているテクストにおいて、ジェンダー問題だけが増幅されるのかどうか、検証する必要があると考えています。ジェンダーの対立要素と、例えば階級という対立であるとか、無産階級とか、消費文化であるとか、あるいは植民地問題、戦争とナショナリズムの問題——そういった要素を入れると、差異の境界がねじれたり、引き直されたりして違う方になってしまうとか、そういうこと。今日の研究発表において、林美子は植民地の問題に言及していないという報告者がいらっしやいましたけど、テクストがすべての歴史的課題を整理して同じ方向を向くとはかぎりません。一方、私自身は、「少女」という作業的な仮説概念を使って女性性というものの本質主義的ではなく、それから母性性を実体化しがいちなるある時期の日本のフェミニズム批評を切断し、色々と流動的に読むっていうことを何度かしています。時々非常に生真面目な方が、「少女」概念を再び実体化して社会現象に還元して、テクストの表象は歴史的现实と違うじゃないかっていわれますが、表象を問題にする限り違うのはあたりまえです。いや、だから現実には本当にしようもないんだっていうことを、過去のテクストを現在の読者が分析して、しようもないんだってもう一回言ってもまさにしようもない。表象分析なのだから、ジェンダーとアイデンティティ

のゆらぎであるとか、ジェンダーの二項対立の境界線のブレであるとかっていうことを、他の要素と組み合わせで分析し、自由な方向で行ってみたいなあというふうに思っています。いい加減なので、お叱りにならないでください、よろしく願います。

吉田

すみません、立教大学で非常勤講師をしております、吉田恵理と申します。川崎先生のお話と、それから金子先生のお話を伺っていて、まず最初に思い浮かんだのが、引き合いに出して申し訳ないんですけども、今日午後最初にあった震災後の福島の人誌研究のご発表だったんですね。ご発表そのものも、とても興味深く聞かせていただいたんですけど、どうお尋ねすればいいのか、端的には金子先生が三つ目の書評の中で仰っている「真っ当さの主張とは異なる回路」ですね。金子先生ならどんなふうにするんだろうと。それから、川崎先生のお話では、まさに震災後の先生ご自身の言語状況のことをお話になりましたけれども、空中戦の言葉が出てこなくて家族の話とか猫の話ぐらいいしかする気がしなかったというお話を伺って連想したのは、今日のご発表の中に例えばワラビを食べて内部被曝したという詩が出てきますね。あれすごく散文的だなと思っただんですね。それ以外の短歌についてもそのように感じましたし、今日見せていただいたものもそうですが、震災後の、私も詩の研究をしているものですから、見ていった時に、やはり散文的だと感じるものがとても多いんですね。そのことと何か結びついてるように感じまして、加島さん

のご発表を聴いて川崎先生がどういうふうに思われたのかな、とお伺いしたいと思うんですけど。

川崎

そうですね、言葉をどういうふうに立ち上げるか。今日の報告者のなかには和歌、短歌の研究者の方もいらっしやるんですけども、そういう特に詩的な言語を立ち上げるためには結構強力な言葉の内圧とか葛藤とかあると思います。今日の報告、大変興味深く拝聴しましたけれども、そこで「フクシマ」のカタカナ化が批判されていました。私はフクシマとかヒロシマとかオキナワとかナガサキがカタカナになるっていうのは、脱領域化であり、グローカライゼーションによる表記である。それはローマ字化でもあるとかんがえます。フクシマは日本語圏でもないところでも語られるべきだって思うのです。今日の福島の同人誌研究のご発表を聞いた時に、福島の問題を福島に住んでいる人たちが所有していいんだろうか、で、そして他の人たちの言説を排除していいんだろうかって、とても不思議に、これは違うんじゃないかっていうふうに思いました。放射能で汚染されたワラビを食べたというテキストについては、石牟礼道子さんの『苦海浄土』の一節を連想しました。漁師が「水俣湾の外に出て遠くから取ってきたワカメだよ」って言うのを、そうじゃないことを知りながら買ってお味噌汁を作ると、モロモロと凝固ができる、汚染されたワカメをその辺から採ってきたんだとわかるけれど、あえてその異物を口に含むという一節があります。それこそ食べて終わりだなんて、そんなに簡単なものではなくて、ほ

とんど宗教的な受苦、身体化、ですよね。毒だとわかっていながらあえて身のうちにおさめようとする。それを思い出したり。一方ではチェルノブイリで被災したベラルーシ地域を取材したジャーナリストを泊めてくれた家で「これも汚染されているんだよね」と言いながら、みんなで汚染されてるだろうと思われる芋を食べていた、どこかしら廃の気分が漂っていたというレポートを思い出したりしました。でもそれは、その地域に根ざして生活していてそれを食べている人だけが語りうることで訪問者や外部の者が語ってはいけません、などと言ってしまうては絶対いけないことだと思っています。公害による海の汚染にしろ、原発事故による水、空気、土壌の汚染にしろ、越境的なものであり、県境どころか、国境を越えて地球規模の危機だと考えるからです。

金子

難しい質問なので、少しズラしてお答えしたいのですが、私の今日の資料には出したけれども話はしなかった部分ですよね。要は、研究としての「真つ当さ」を担保する手段として、しばしば「当事者性」という言葉が使われていて、それを全て否定するのではないのですが、そこにある落とし穴というか陥穽を意識する必要があると思っっています。つまり、研究主体としてある問題を扱う権利を持っているとか、逆に義務があるとか、資格があるとか、そのように研究主体のあり方を軸に断定的に言い切ってしまうとき、そのような主体はもちろん、権利とか義務とか責任とか、それらが歴史的・社会的にどのように構成されているか、

そのような研究実践が何を意味しているかを問う回路が切り落とされてしまう。例えば今日話題になった「福島」（あるいは「フクシマ」という言葉の使い方の問題であれば、一方でオーソドックス（正統的）なアカデミズムのスタイルをとれば、実際の用例だけを収集して分析することもできるわけです。つまり、自分の言葉としては全く使わないけれども、他人がどのような場合にどのような表記をするかという第三者的な研究は可能です（もちろん、それが「第三者的」にニュートラルなものではあり得ないという批判も可能ですが）。しかし、たぶんみなさんを含めて今日の多くの文学研究者は、そのやり方ではダメなんじゃないかと思っっているようです。その理由はいろいろだと思いますが、自分自身でその言葉を使う、場合によっては言葉の使われ方のトレンド形成に介入する立場になる、つまり自分を何らかの程度で発信者の側に置いた時に、はじめて研究の意味が生まれてくるように思われるということではないでしょうか。その時、言葉の発信者であると同時にその言葉の研究者であるという主体の乖離のような事態が生じるから悩みが多いわけです。研究に携わる多くの人が、何らかのかたち・程度での状況への介入を志しているのだと思います。先ほど川崎さんがおっしゃったのと同じことを逆側から言っているのだと思うのですが、ここでは、研究するという行為によって「当事者性」がシフトするという事態が既に生じているのです。研究することによって「当事者性」がどのようにシフトするかということ、つま

りある言葉を使うことによって、その言葉を使う主体の構成がどのように変化するかということ、そのような研究する行為の意味への自己言及を研究としての記述と接続させることが重要なのではないかと思います。

日比

最近『文學界』で新人小説月評というのをやっていたんですが、群像新人賞をとった北条裕子さんの『美しい顔』っていう小説をめぐって、剽窃、表現の盗用をめぐって批判があつたり、被災地のことを書いたにも関わらず被災地に行かないまま津波と被災した家族の様子を描いたと非難されたり、という問題があつて、それにちよつと口を出していました。その時、当事者性っていうのをものすごく厳密に考える人たちがいます、実際に津波の被害を受けた、あるいは死んだ人じゃないとわからないというんですね。その主張は、もちろんその通りなんだろうけれども、でもそういうふうにして閉じていってなにかを囲い込んでいった時には、なんかもものすごく狭い文学しか生まないだろうと思つたんです。文学っていうのは、嘘が許されているジャンルであるから、自分が被災者でなくても、自分が被災地に行つたことがなくても書いてもいいんだ、書くことが許される、そういうジャンルだと私は思うんですけども、やっぱり今の雰囲気、言論の状況っていうのは、そういう遊び心が許されない方に行つてしまっているような気がします。小説家っていうのは、空想で書いてもいいし、被災地に行つてなくても被災地のことを書いてもいい、もちろんそこにはある種の責任とか、勉強しなきゃいけない

加島

ものがあるのだけれども。私はそう思っています。それから盗用の問題についても、やっぱり歴史を知っていると、違ふ考えを持ちます。つまり小説というのは非常にいい加減なジャンルだったわけで、いろいろなところから言葉を引つ張つて来まくつて作っていた文芸でしょう、ということとです。いまの言論は、このあたりの感覚がやや窮屈になつているんだなあと思っているのですが、ただこれについてなかなか世間を説得するのは難しいというふうに感じていたところでした。言われればなしで多分ストレスが溜まっているじゃないかなと思うんですが、加島さん、何か今の議論を受けて反論なり、自分の思いなり、聞かせていただきたいと思うんですが。

本日、発表をさせていただいた名古屋大学大学院の加島です。日比先生、ありがとうございます。今回の発表では、福島に関係のある「当事者」の方が震災や震災に関する様々な言説に、どのように反応しているかという点に焦点を当てすぎてしまい、直接は福島に関係のない方々の反応を落としてしまっているので、それは「当事者」でない人間は震災について話すべきではないという印象を持たれかねない危険性があるなど、既に多数の方からご指摘いただきましたが、反省しております。ただ今回発表を構成するにあたって、別のことも考えておりました。今年の3月にカンニング竹山さんが「福島のことなんて、誰もしらねえじゃねえかよ!」（ベストセラーズ、2019年3月）という本を出版しているのですが、「はじめに」でこの本は

ゴーストライターが書いていると断りが入っているんです。彼はそのことについて、AERAのインタビューで「そこまで嘘がない本ですよってことを伝えたかった」と書いているのですが、それは本の内容が批判された時、ゴーストライターが書いたことだから、と批判をかわすための周到な逃げ道のようにも私には思えたのです。そして本のかでは、竹山さんがプライベートで訪れた福島県の「率直な」姿が描かれているとされるのですが、しかしそこで触れられる福島県はひとつの側面にすぎないと思うのです。もちろんこの本で書かれたことには嘘がないとする竹山さんの言葉は事実でしょうし、彼が「善意」で福島に関わっていることも理解できるのです。しかし彼には見えていない、あるいは見えていないものがある。たとえば生活居住区の放射線量は低かったとしても、居住区を取り囲む森林の除染は行われておらず、風向きによって線量が増える危険性などには触れられていません。ただしここで重要なのは、彼に福島のある側面を見えなくしている、あるいは見えなくしていることの背景に、福島を住めない地域であるかのよように「フクシマ」と表記するのはやめてほしいと考え、「フクシマ」表記に傷つき、憤る当事者の思いがあることだと思ふのです。その当事者の思いに応えることは必ずしも間違っていないと思いますし、そこに応えようとしたのが彼の「善意」なのだと思います。しかしその思いに単純に応えてしまうと、福島に住むことが難しい地域があることを隠蔽したい権力者の側の思惑と結びついてしまう危うさが

ある。福島は住むことができない危険な地域「フクシマ」であるという表現は使うべきではないと考えますし、福島という大きな主語ではなく、どの時期の計測値なのかに注意しつつ、より地域を限定して語るべきだと思ふのです。しかし、素人の私には、計測値を見て居住可能か否かを自信を持って断言することはできません。「危険／安全」と安易に言ってしまうことの危うさや、私が福島の実をどう捉えるのが適当なのかを見定められないこともあり、福島のことをどのように記述すればよいかのわからない。複雑な状態に置かれた福島のことを、複雑なまま表記する言葉が見つからない。その複雑さをわかっているからこそ、竹山本は「ゴーストライター」という逃げ道を用意したのではないかと、私は勘ぐってしまうのですが、これからも福島に住み続けようとする人たちにそのような逃げ道はない。ならば「当事者」の人たちがどのような言葉を用いて表現を行っているのかを整理した研究は見当たらないので、まず「当事者」の表現を整理するところからはじめられないのではないかと考え、今回の発表を準備いたしました。ただ「当事者」に重点を置きすぎて、「当事者」の表現と衝突する「当事者」でない人の表現が落ちてしまっている点が危うく、「当事者」とそうでない人の表現がどの点で衝突しているかをまず考えたいのですが、考えるべき要因が次々に浮かび上がり、より複雑な構造が見えてきているので、ますますどのように福島を記述すればよいかかわからなくなっている……というのが今の思いです。

金子

…二点コメントしていいでしょうか。ひとつは、さきほど加島さんの発表に関する質疑で出たコンクルールの話に関連して、あれはとても面白い話だと思いました。書かれたものを読んでも、書き手が被災者なのかどうかは実際のところ判断できないということですよ。本当にそれが判断できるくらいの人でしたら、「当事者性」をジャッジする権利があると誇れるかも知れませんが、それではそのような「当事者性」をジャッジする場所に関わる「当事者」とは誰なのかと考えると、ジャッジすることの根拠がよくわからなくなってしまうということです。もう一つは、紋切り型の表現というのは、ジェンダーの場合もそうですが、言葉が主体になって人がそれに従属する構図です。しかし、言葉の方が主で言葉を発する人が従になるという構図は、多かれ少なかれ構造的なものです。ですから、原理的に言葉は他人のものということにもなるわけです。そう考えると、紋切り型が全くダメだとか、誰かが自前の表現を正当に所有できるというようなことではなく、本の宣伝文句のような紋切り型の表現を含めた複数的な意味が重層する場で、紋切り型の解釈に収まらない意味の重なりや組み合わせをいろいろ試すことで化学反応のようなことを引き出すことが大切になるのではないのでしょうか。意味の重層性を考慮しながら、そこからどういう組み合わせ方で意味を引き出すかという戦略的な思考が意味を持つように思います。

日比

…ありがとうございます。なかなかまとめるのはむづかし

いのですけれど、私の感想は、今日は論理的なことも話したんだけど、それと同時に、なんだろう、それぞれの生きている人たちの人生が、どういう状態であったとか、なにおこったか、というようなことについての、ある種の感度というか、感応というか、そういうった人間的な部分が、実は研究とかみ合っているということについて、先生方のそれぞれのお話を聞きながら考えさせられました。そうした人間的な部分は出来上がった本の中からはうかがえなかつたりするわけで、今日はあらためてそんなことにも思いを馳せる、そんなセッションになりました。いろいろと議論は尽きないかと思いますが、先生方、会場のみなさん、どうもありがとうございました。

研究会の感想

名古屋大学大学院生 楊 佳 嘉

名古屋大学人文科学研究科日本文化学講座では、毎年3月に飯田ゼミ・日比ゼミを中心とした教師と院生たちがほかの大学を訪問し、合同研究会の形で研究と交流を目指す「年中行事」が行われる。今年の訪問先は立教大学である。3月14日当日の研究会の様子思い出すと、濃密かつ興味深い盛会だったと思う。以下は当日の教員セッションについての、私の記憶および感想である。

石川先生は過去と現在そして今後の研究の展望について話され、研究者の役割である〈人文知〉を提示された。自分が若い頃から歩んできた研究生活の経験と今の若い世代の院生たちへの期待を感じた。院生たちが投稿する際に注意しておきたい点をたいへん丁寧に指摘していただいた点が印象深かった。

川崎先生は東日本大震災と福島原発事故以降の自分の経験を契機にして、震災後の関心の変化を説明し、横断的なデータベース、アーカイブの探索や、ブランケ文庫の研究の現状に触れつつ、一次資料や「文」と「史」の関係性、日本人の日本研究における特権の主体の解消などの課題を提示された。「文章としての歴史性が危ない」という指摘が私にとって、一番示唆的だった。

飯田先生は今までのジェンダー批評界におけるジェンダー・バイナリな傾向を指摘し、それを再考しながら「ジェンダーズ」という概念を提出し、男／女の二項対立のような枠組みを越え、より複数性のあるジェンダー批評の未来に向けて話題を提供された。それに対して、会場からは「ジェンダーズ」の概念、公的領

域におけるジェンダー分析などの問題が指摘された。研究における二項対立を避ける意識、ジェンダーのみならず、ほかの多数の要因と総合的に絡み合い、多数重層的な視点が必要であることを改めて考えさせられた。

日比先生は外地と内地を結ぶ書物流通の研究を紹介し、書物流通という文化のインフラと文学の問題の関係性について話された。本は〈物〉か〈知〉か? 「そのどちらでもあるところが本という存在の面白さであり、その物と知を跨ぐあり方を掘り下げることが研究の新しい展開になっていく」という日比先生の解釈は刺激的である。

金子先生はこの十数年来書いた3本の書評を例として、文学／文学研究における「正統性」と「正当性」批判から研究者の「主体化」の条件と可能性を議論された。その「歴史的な時間軸の中で、「言」を「預」かる「者」の媒介作用を論理化する」という主張は今後の研究に向けた新しいアプローチとして深く考えるべきだと思った。

このセッションの後、私に残された課題は人文学が周縁化されつつある現在において、先生がたに提供していただいた近代文学研究の「いま」と「これから」の様々な問題について、次世代の私たちは何をすべきなのかということである。困難であるとは思いますが、自分の研究を単に自己満足するためのものにせず、「文」と「史」に直面する際に、より慎重な態度で、二項対立を避けるような多重的な視線と地域や、学術領域を横断する広い視野で、従来の〈知〉を批判的に継承しながらも改めて問い直し、より挑戦的な姿勢で「人が自由になれるもの」(石川先生の言葉)である〈人文知〉を生産することが必要ではないだろうか。

合同研究会感想

立教大学大学院生 瀬 口 真 司

川崎ゼミの代表として3月14日の合同研究会で発表機会をいただきました。名古屋大学の皆さんは毎年各地の大学の近現代文学ゼミと合同研究会を行っているようですが、私は前回の広島大学との合同研究会にも広大の学部生として参加しており、偶然にも2年連続で名古屋大学の皆さんと交流することができました。積極的に各地の研究機関とつながりを持つ取り組みについて名古屋大学の皆さんに学ぶことは多いと実感もっています。

また、立教大学のなかでも複数のゼミの院生が合同で議論に参加する場は多くはなく、私自身なかなかお話しする機会がなかった先輩方も研究を通して関わることができました。そうした面でも貴重な機会だったのでないでしょうか。そのなかで今回、立教大学の発表者として参加できてとても光栄でした。

私の発表内容については、昨年末に石川先生のもとで機会をいただいた際のゼミ発表を下敷きに塚本邦雄『綠色研究』について論じ、書物論的な観点を取り入れながら歌集の主体について検討するといふものでした。拙い発表でしたが、長い春休みの期間にひとつ目標があったことで怠けやすい私の生活には大きな影響がありました。ちょうど就職活動が始まる時期でもあり、それまでの1年間を振り返る意味でも、自分の力や研究への態度について考える時間が何度か訪れる準備期間でした。

現在、その際の発表内容を論文化するべく当日の資料を修正し、再び歌集と格闘する日々が続いています。

研究の中身もさることながら、日常的なゼミ発表以外の場での口頭発表についても経験不足で（聴く側としても場数がまだまだ足りないなと思います）気負いすぎてしまう場面がありました。研究会終了後も飯田先生、日比先生をはじめとして名古屋大学の院生の皆様にご質問やご意見をいただくことができてとても感謝しています。日頃から顔を合わせてお互いに研究の動向や前提を共有しているゼミの皆さんに聴いていただくだけではなく、私の研究を初めて聴く方にも伝わるようにしなければならぬという研究会の場の性質を今後はよく考えるようにしたいと遅ればせながら思います。名古屋大学側の発表者の方々の資料レジュメの作り方や口頭発表の様子をうかがっていて、研究発表を公の場で行う姿勢について参考になる点が多くありました。学会や他の研究会など、よりオープンな場での発表を見込んで今後も研究を続けていくうえで、今回の経験が役に立つだろうと確信しています。

大学院に進学して博士課程前期課程を1年間過ごしたタイミングでこのように貴重な機会をいただけたことで、進路や生活について考えることの幅が広がったように感じています。またどこかで名古屋大学の皆さんとお会いたした時には、よりよい研究発表ができていますように今後も大学院での研究生活に励みます。ありがとうございました。

教員セツションについての感想

立教大学大学院生 米 山 大 樹

「近現代文学の〈いま〉と〈これから〉」というテーマは、日本近現代文学研究の対象と方法が変容・拡大している現状を意識したものでしょうか。その変容・拡大の第一線に立つ五人の研究者の話題提供は、それぞれの率直な問題意識の提示であった。研究の〈これまで〉を間接的にしか知らない私にとっては、視野を少しずつ借りることができたようで、貴重な機会となった。

特に印象に残ったのは、日比嘉高氏による、書物流通研究に関する話題だ。日比氏は、〈物〉としての書物の流通プロセスをフローとストックの諸局面から説明した。書物の研究と聞くと、私は、室生犀星の自著装幀や江戸川乱歩の蔵書など、作家や作品を中心に配置した狭く閉じた関係性から考えてしまうが、日比氏は複数のネットワークが交錯する「生態系」のように捉えることが重要と述べた上で、書物流通研究を作品研究などの文学研究に「つなぐ」戻す必要はあるのか」と問いかけた。川崎賢子氏の話にあった、プランゲ文庫などのデータベースやアーカイブのあり方、そこに研究者がどのような「資料空間」を創り出すかという問題と併せて、書物の流通・保存のあり方と無関係な文学研究はあり得ないとも考えさせられる。文学研究の〈知〉のフローとストックはどうだろうか、どのようにたみたい、どのように蓄積しているのだろうか、そのネットワークはどんな形で、私はどこに参加しているのだろうか、などと漠然と思いを巡らせた。

研究における変化と言えば、石川巧氏は、山口県で研究者生活

を送っていたとき、〈中央〉としての東京に対する〈地方〉意識が働いていたと述べた。その代表的な活動が雑誌『叙説』での特集である。先行研究の調査などで読んだ二〇〇〇年前後の『叙説』が魅力的に感じられたことを思い出す。それは、今回の教員セツションのなかで挙げた、『跨境』や『Juncure』といった研究誌を読むときに感じる現在の有意義さとは異なる魅力だ。〈中央〉に対する〈地方〉・〈周縁〉という構造を活力としたという時期に石川氏が携わった『叙説』と、そのような構造自体に批評的である『跨境』や『Juncure』との違いに、私は、飯田祐子氏のジェンダー研究に関する意識変化の話題を連想する。〈男〉と〈女〉の二項対立を前提としてきたジェンダー研究だが、現在では、ジェンダーの流動性や複数性が主要な論点になっていると飯田氏は述べた。それを象徴するのが、『Juncure』での特集における「ジェンダーズ」という複数形である。飯田氏はジェンダー研究に関する意識変化を踏まえた上で、多様な「ジェンダーズ」の研究とともに、二項対立的なあり方についても、それを再生産しない形でおし続けることの重要性を強調した。

金子明雄氏の「正統」と「正当」という言葉を借りれば、ひとつの「正統」が求められる傾向が弱まり、多様な「正当」を跨いで繋がりあうのが、文学研究の現状だろうか。そこで、それぞれの研究者が、研究の〈これまで〉を不断に捉えなおしていく姿を垣間見たように思う。そして、今回得た視野は、なによりも私自身の研究を見つめなおすために用いなければならないだろう。

合同研究会に参加して

市川 遥

私は発表者ではなく、聴衆としての参加であったが、様々なテーマと向き合う研究者の発表を拝聴できたのは、非常に貴重かつ、刺激的な経験であった。

修士の発表は、同時代状況への目配りや先行論の整理など、いずれも丁寧な報告であった。特に性や身体というテーマへの関心の高さを改めて感じた。

個人的には松本拓真氏の発表が印象的だった。自身の問題意識の中心である、文学における障害者表象というテーマは、社会的・歴史的な文脈を捉えるという意味においても、現実と文学表象の接点という意味においても、多くの課題を抱えるテーマである。

それゆえ、表象の細かい点にまで質問が相次いだ（また、僭越ながら私も質問を重ねたが、今後、大江研究の一部としても、学際的な研究としても、更なる発展が期待される発表であった。

博士の発表は、いずれも緻密な調査・分析を重ねた骨太なものであった。例えば加島正浩氏の報告は、広範かつ膨大な数の資料の収集と概観のみならず、時間を経て変化する、震災以後の東北の「今」に切り込む、重要な発表であった。

また、加藤明日菜氏のご報告では、同時代状況・作家の周辺・そして作品分析と、文学研究の手続きを誠実にふまえられていた。議論の中からはユートピアに関する理論的な定義づけの難しさも垣間見えたが、作品の魅力を再発見する意欲的な発表であった。

教員セッションにおいては、まさに文学研究の「いま、こゝに」

についての熱い話題提供が続いた。川崎賢子先生が、プランゲ文庫の資料について述べられた「一次資料を持つものの特権性」という趣旨のお話が印象的であった。ご自身の東日本大震災の際のご経験を拝聴したことも相俟って、ここでは、研究者もまた、ある時代を生きる人間であり、その中で何をどう研究するのか、ということを考える必要性について痛感させられた。

先生方が取り組まれているご研究のスケールの大きさ、そしてそれに比例する形で、行き当たった「壁」の高さに圧倒されてしまい、フロアからの質問が少なくなってしまったことについては反省が残る。しかし、研究会後に、院生の中で教員セッションの話題が数多く上がっていたことを考えれば、学生それぞれの関心の中に、先生方の問題意識が深く刻まれたことは確かである。

本来なら全ての発表に言及すべきところ、紙幅の都合上一部のみの印象について述べることとなったが、全ての発表から方法論や問題設定の視角を学んだと同時に、自分の研究の詰め甘さを再点検する機会をいただいた。また、文学研究に情熱を注ぐ仲間が存在を改めて実感したことで、自分自身非常に勇気づけられたことを書き添えておきたい。

最後に、資料やパワーポイント、会場等々ご準備頂いた、立教大学の先生方や院生の皆様、スタッフの方々に深く感謝したい。

今回のことを一つのきっかけとし、立教大学と名古屋大学の交流が、今後も末永く続いて行くことを祈念したい。